

〈研究動向〉

デカセギ移民へのまなざし —英米とブラジルにおけるデカセギ論—

アンジェロ・イシ

1 はじめに一分析対象の設定基準をめぐって

本稿では、1980年代以降のブラジルから日本への「デカセギ」移民現象について、日本（語）以外で発表された研究に関する考察を主目的とする。依頼されたテーマは「ブラジルおよびアメリカ合衆国での研究動向」であったが、この分野の業績が英国を拠点にした研究者によっても蓄積されていることから、少し対象地域を広げて「ブラジルと英米での研究動向」を論じることにした。なお、各国で発表された文献の多くがごく一握りの著者・編集者によって企画・執筆されていることが判明したため、文献の内容や結論そのものよりも、むしろ各研究者の視点やその研究方法に注目するほうが有益だと考えた。

グローバリゼーション時代と言われる今日、研究の対象となる人々が精力的に移動しているのはもちろん、彼ら彼女らを追う研究者もまた、ますますネットワークが軽くなっている。「アメリカにおける」あるいは「ブラジルにおける」研究という括りが危ういことは承知している。また、「アメリカ人研究者」のような国籍による分類も決して自明のことではない。例えば、本稿では日本生まれで英米に移住している（英米を活動拠点にしている、という表現がより適切かもしれない）日本人研究者2人の研

究を分析に含めることにした。結局、本稿の分析対象は、具体的には英語もしくはポルトガル語で書かれた出版物が中心となる。入手が比較的容易であり、人目に触れる機会が多いことから、原則として公刊されている単行本もしくは論文集を優先する。

ところで、私は本稿で紹介する研究者の多くとは面識があり、情報源になったこともある。しかも、自分も同じテーマの研究者である以上、彼らの業績に対しては「調査対象者」としての厳しいまなざしと、「同業者」としてのわがままな注文が、時にはやむなく混合していることを断っておきたい。

2 英語圏における研究

2-1 編著に所収された論文

英語で出版されたデカセギ関連の研究書は1990年代を通して皆無に等しかったが、2000年以降、一気に質量ともに充実し、2003年には6冊もの骨太な単行本が出版されて、まるで「バブル」を迎えた感がある。バブルという表現が相応しいのは、2004年にも2005年にもデカセギをテーマとした書物は発行されず、最も熱心にこの分野の研究を進めていた研究者たちが日本でフィールドワークを行なっている気配もないからである。その理由については後述することにして、まずは「バブル」前の諸研究を紹介しよう。

1990年代のものとしてはヨウコ・セレックの論文 (Sellek 1997) が挙げられる。ただし、そこで展開されるのはデカセギに関する当たり障りのない概観で、日本の研究者にとってはさほど参考にならない。

2000年に出版されたダグラスとロバーツの編著 (Douglass & Roberts 2000) には、デカセギ者を直接扱う論文としてケイコ・ヤマナカ (山中啓子) による6章 (Yamanaka 2000) とテグトマイヤー・パクによる11章 (Tegtmeyer Pak 2000) がある。ヤマナカ論文は「私は家に帰る、でもいつ?」 ("I will go home, but when?") というタイトルからも連想できると

おり、母国に戻りたいけれどいつになるか分からない、デカセギの迷いを表している。またサブタイトルには「循環型ディアスポラ (circular diaspora)」という概念が用いられ、デカセギ移民が日本とブラジルを往来している様子が強調されている。他方、パクは外国籍住民が増えた地域の行政の取り組みに着目し、例えば韓国・朝鮮籍が多い川崎市とブラジル籍が多い浜松市が比較検討される。

ヒラバヤシ他の編著 (Hirabayashi et al. 2002) に所収されている諸論文では、デカセギ現象が日系移民史の延長線上に位置づけられている。この編著は全体として「グローバリゼーション時代の日系人のアイデンティティ」を取り上げており、「日系アイデンティティの分裂」(Disjunctions of Nikkei Identities) と題された「パート3」で「デカセギ現象」(The Dekasegi Phenomenon) として、エジソン・モリ (Mori 2002)、マサト・ニノミヤ (Ninomiya 2002)、マルセロ・ヒガ (Higa 2002) による3本の論文が掲載されている。モリはデカセギ現象の経済的側面、ニノミヤは子供の教育問題、そしてヒガはアルゼンチン出身の日系人の日本への移民を取り上げる。ニノミヤ論文が扱う教育問題は、すでに他の研究者にも論じられて来たテーマだが、モリ論文の経済論はあまり光が当てられて来なかった側面である。ヒガ論文は、ブラジル人やペルー人に比べて人数も研究の数も少ない、アルゼンチン出身の人々の事例研究として貴重である。

以上のように、2002年までの英米でのデカセギ論は、あくまでもより大きな枠組みを掲げる論文集の一部という形でしか居場所が与えられなかった。しかも、その著者たちは、ほとんどの場合、英米の出身者ではなく、外国出身で英語以外の言語を母語とする研究者であった。これに対し、英米出身の研究者は、すでに1990年代から地道にこのテーマを研究し、学会(誌)等で中間報告的な研究を発表してきたが、その集大成的な成果が世に出るのは2001年以降、とくに2003年である。以下、その代表的な研究(者)について考察する。

デカセギをテーマとする単著の出版を基準にするならば、英米で最も代

表的な研究者と言えるのは4人にしぼられるであろう。それは、米国人の人類学者3人(ダニエル・リンガー、タケユキ・ツダ、ジョシユア・ホタカ・ロス)とポルトガル人の社会心理学者1人(ダニエラ・デ・カルヴァリヨ)である。この4人のうち、1人は2001年に、1人は2002年に、他の2人が2003年に単著を発表した。ここでは、それらを仮に「4大著作」と呼ぶことにしよう。その比較分析は次節に譲るとして、ここではまず、これまた2003年に出版された二冊の論文集を紹介したい。それはカルヴァリヨも寄稿しているグッドマンの編著(Goodman 2003)と、3人の米国人が寄稿しているジェフリー・レッサーの編著(Lesser 2003)である。この二冊は英語圏で最も積極的にデカセギ論を展開している研究者たちの論点を手短かに比較する上で、格好の論文集である。

まず、グッドマン他の編著(Goodman et al. 2003)には、アユミ・タケナカ(竹中歩)によるペルー人のデカセギ論(Takenaka 2003)、カルヴァリヨによる「日本における日系人コミュニティ」(Carvalho 2003)、そして私がブラジル人の頻繁な往来から生まれた新たな可能性を探った「移民のトランスナショナルなストラテジー」に関する章(Ishi 2003a)が所収されている。私の章については機会をあらためて紹介することにして、他の2論文に関して解説を加えたい。カルヴァリヨは論文のタイトルには「ブラジル」という言葉を使用していないが、実際には日系ブラジル人のコミュニティ形成が論じられている。なかでも、群馬県大泉町の事例を詳述しているが、内容的には新鮮味は薄い。むしろ新鮮なのは、英国を拠点に研究活動をしている日本人研究者、タケナカの論考である。彼女はタイトルで「日系ペルー人(Japanese-Peruvians)」と「ペルー人(Peruvians)」を併記しているが、ここに視点のオリジナリティがある。タケナカは日本政府の日系人優遇政策が、在日ペルー人社会の階層化を促したと分析する。その結果、「本物の日系人」(Nikkei verdaderos)、「混血の日系人」(Nikkei mestizos)、「偽日系人」(Nikkei chichas)と「不法滞在者」(ilegales)の間で階層化が進んでいることに注目する。そして、誰が

「日系」で誰が「日系」でないか、あるいは「誰が誰より日系なのか」という議論が浮上したことを指摘する。日本における移民研究全般、とりわけ日系人研究が「文化的差異」を過大評価しているという指摘も鋭い。タケナカ論文は日系ペルー人のデカセギに関する単なる事例研究に止まらず、タイトルが物語っているとおり、「エスニシティをベースとした移民のパラドックス」を暴いている。と同時に、間接的にはあるが、ブラジル人もペルー人も同じ「南米日系人」として論じようとする多くの研究者が、いかに強引な単純化に手をそめているか、警鐘を鳴らしている。

一方、レッサーの編著 (Lesser 2003) は、ブラジルと日本における日系人にテーマを絞った論文集であり、第一線のデカセギ研究者によるスリリングな舌戦＝論戦を読み比べることができる。ツダ (Tsuda 2003a) が「日系人」の集団アイデンティティについて壮大なスケールで語り尽くそうと努めたと思えば、リンガー (Linger 2003) が「日系ブラジル人は存在するのか？」と釘を刺し、論文集全体のテーマ設定そのものに挑戦する。ロス (Roth 2003) はデカセギ問題の論争を (意図的に?) 避けて、ブラジルに永住している日系人が選挙権問題とどう向き合っているのかについて書いている。

これら3人の研究については後に詳述することにして、本書の他のデカセギ論者について簡潔に説明したい。前出のヤマナカ (Yamanaka 2003) は、しばしば軽視されがちなジェンダー問題に言及し、女性移民に着目している。親しみやすい文体が際立つのはカレン・テイ・ヤマシタ (Yamashita 2003) の章である。ヤマシタは作家で、『ブラジル・マル』 (Yamashita 1992) や『サークルKサイクル』 (Yamashita 2001) というエッセーで知られるが、彼女の章は「日本のルール」、「ブラジルのルール」、「アメリカのルール」という具合に、それぞれの社会のルールをユーモラスに綴り、文化的差異への寛容性を推奨している。本書で文化摩擦を強調するヤマシタやエスニック・アイデンティティに焦点を当てるツダに対し、私が執筆した章では、むしろ階級意識や職業アイデンティティの重

要性を力説している。弱者としてデカセギ者が不利な条件に直面していることは自明であるが、私は彼らがどのような打開策を見出しているのかという側面を重視した。

本書の各執筆者の視点の違いは、結局のところ、移民の主体性と適応能力をどう評価しているかにあると思われる。執筆者相互の意見の対立をあえて隠ぺいも抹殺もせず、同じ一冊の中に収め切った編者レッサーの功績は大きい。編者による解説でも論争に決着をつけていないので、不完全燃焼だと思う読者もいるかもしれないが、気の合った仲間どうしや似た意見を持つ共同研究者による論文集とは明らかに異なる作品に仕上がっていることは確かである。

2-2 英語の「4大著作」

では、いよいよ「4大著作」とその著者の視点・問題関心の比較に入りたい。リンガーは、4人のうちで最も独創的（少なくとも挑発的）な本を書いている。これは、愛知県豊田市にある有名な保見団地（住民の3人に1人がブラジル人だと言われる、1万人規模の団地）で出会った、わずか9人の日系ブラジル人へのインタビュー記録を中心としている。彼が書名に「アイデンティティ」という言葉を用いず、「自我 (selves)」という用語にこだわった点は見逃せない。

「人物中心のエスノグラフィー」(person-centered ethnography) を提唱したホーラン (Hollan 1997) やレヴィー (Levy 1994) に共感するリンガーは、人々を「社会的カテゴリー」(social categories) に無理矢理当てはめようとする研究(者)を強烈に批判し、「人々の人生を理論に従属させてはならない」(“One may not subordinate lives to theory”) と主張する (Linger 2001: 10)。各章の表題には、テーマや概念等のキーワードをあえて用いずに、主要なインフォーマントの名前(仮名)をそのまま使っている点は、「カテゴリー化」を拒否する著者の姿勢を裏づける。確かに、この方法は著者が提示する論考に都合の好いフレーズだけが唐突に登場し

ないので、「他人によるチェックの可能性」、すなわち「研究成果のアカウントビリティ」に優れているといえる。

結論を急がず、そして自分に有利な発言のみを断片的に引用せずに証言のコンテクストを重んじるリンガーの姿勢や、インフォーマントとのやりとりをできるだけそのまま再現する手法には好感が持てる。有名人や「珍しい」人物に目を向けることが多いジャーナリズムの世界でも、無名で「普通の」人々に耳を傾けた「人物中心」のが模索されて来た。

一方、ツダの研究では、その副題のとおり、「トランスナショナルな視点から見た日系ブラジル人のリターン・マイグレーション」(Japanese-Brazilian Return Migration in Transnational Perspective) が考察される。数カ月にわたって、工場でブラジル人と同じ肉体労働をし、同じ寮に住み込んだツダのフィールドワーカー魂には敬服する。しかし、そこで得られた豊富なデータから見出した日系ブラジル人に関する多くの「結論」には首をかしげざるを得ない。仮に彼の著書をポルトガル語に訳して在日ブラジル人に見せたならば、果たしてその内容の何割に納得するだろうか。

例えばツダと私が最も意見が異なる点の一つには、デカセギ移民が日本で社会階級が低下することを気にしているか否かという問題がある。ツダは彼らは来日前からすでに心の準備ができているため、みんな同じ非熟練労働をやっているから苦にならないと力説する。それを裏付けるため、「私たちは皆同じ船に乗っている (“Nós estamos todos no mesmo barco aqui no Japão”）」(Tsuda 2003b: 299) という口癖を例に出す。しかし、私はこの言葉を鵜呑みにしてはならないと思う。これは彼らの本音ではなく、必死に自分に言い聞かせる自己暗示だと考えるからである。心の準備ができていと信じていた者も、いざ来日してみれば、ブルーカラー労働者という身分になったことが理由で精神的ストレスに苦しんでいる (Ishi 2003a)。

ツダにとっての一つの重要なキーワードは「エスニックな抵抗」(ethnic resistance) であり、それが彼らを「トランスナショナルな状況の中で

居場所と方向性を見失う状況」(transnational liminality)に陥れているという。おそらくこの悲観的なシナリオを描く理由は、著者が序章で説明しているとおおり、日系ブラジル人の主観に止まらず、日本人の日系ブラジル人に対する「エスニックな姿勢」(ethnic attitudes)を重視したからだろう。

ツダの著書には、エスニックな排除 (ethnic exclusion)、社会経済的周縁化 (socioeconomic marginalization)、ステイグマ (stigma)、ネガティブ・マイノリティ (negative minority)、エスニックな孤立 (ethnic insulation) や社会的疎外 (social alienation) など、悲観的な言葉が頻出する。一言でいえば、全体的にはブラジル人を取り巻く困難な状況や構造的な問題を過大評価し、それらを要領よく克服する彼らの創造力と柔軟性を過小評価していると思われる。

前述した2冊には著者の主眼を伝えようとする情熱がみなぎっているのに比べ、ロスの文体は、ある種の脱力感と冷め具合が印象的だ。その違いはページ数の比較からもうかがえる。リンガーの著書が342ページ、ツダのそれが431ページの「大作」であるのに比べ、ロスの著書はわずか165ページである (ちなみに、3冊とも本のサイズや文字はほぼ同じである)。ページ数での単純な比較にさほど意味はないのは承知しているが、いずれも在日ブラジル人の「真相」に迫ったことを自負している以上、分量はそれなりに有意義な比較要素だとも言えるだろう。

ロスは静岡県浜松市での労働・生活体験に加え、サンバ関連の文化活動やブラジル人へのボランティア活動等を含めた、フィールドワークを基にしている。『仲介された祖国』(*Brokered Homeland*)という書名は、おそらく「ブローカー」、すなわち人材派遣でブラジル人を搾取する仲介業者を連想させる言葉として捉えてよかろう。本書のデータの提示の仕方には、ツダのように日系人を複数形で語る部分もあれば、単数形で日系人の個別の事例を提示する部分も多いが、リンガーのように、会話を書き写すことはなく、筋立てはあくまでも著者の視点によって構成される (例えば、

76ページのヴァネッサ・キムラや80ページのジルベルト・ホンダのケースは75ページの「労災」という問題を裏づける事例として意味づけられている)。

最後に紹介するカルヴァリョは、前述の3人とは背景がまるで異なる。まず、彼女はポルトガル出身であり、母語も、当然、ポルトガル語である。生活の拠点は米国ではなく、欧州である(英国の大学で勉強し、ポルトガルの大学に勤務)。4人のうちの唯一の女性である。そして、他の3人が文化人類学者であるのとは違い、専門は社会心理学である。しかし、興味深いことに、カルヴァリョの著書の構成は、見事にツダやロスのそれと似通っている。すなわち、前半でまず、日本からブラジルへの移民史の概略と日系人社会の現状について考察し、それを踏まえて現代のブラジルから日本へのデカセギ現象を語るという手法である。(構成については、リンガーだけは、書名に「日系ブラジル人」(Japanese-Brazilians)ではなく「ブラジル人」(Brazilians)と明記されていることから想像できるとおり、異なったスタイルを試みている)。

カルヴァリョは自分が「日系」でないことが、遠慮のない、より客観的な論考を可能にしたと自負している。確かに、本書では在日ブラジル人をめぐる最も重要な争点が手際よくまとめられている。しかし、実態の記述には初歩的なミス(とりわけ単純なスペルミス)が目立つ。アフリカ系ブラジル人の宗教「カンドンブレ」(candomblé)がcamdobléと誤記された(Carvalho 2002: 139)のは大目に見るとしても、カーニバルが開催される浅草のことを赤坂(Akasaka)と間違えたり(Carvalho 2002: 184)、NHKを「NKK」と記しているのは許容範囲を越えているのではあるまいか。

私の専門でもあるエスニック・メディアに言及している103ページでは、雑誌名の『Check-in』を『Cheque』と記したり、『Jouzu』が『Jozo』と誤記されている。これは、おそらく、カルヴァリョがメディア企業の関係者と一回限りの短時間のインタビューを行ない、雑誌の実物を手に取るこ

ともなく、調査協力者の証言のみに依存したからであろう。その点においては、他の3冊のほうが明らかに細部にこだわり、信頼性が高いといえよう。

2-3 異なる在日ブラジル人論

以上、デカセギに関する「4大著作」を概観すると同時に、すでにくつかの論点について比較を試みたが、次に、それぞれの視点に注目して相違点や共通点をさらに検証したい。まず、4人の研究者の間には、互いにある種の遠慮が働いている様子が垣間見られる。例えば、調査地については、見事な棲み分けが見られるのである。リンガーが愛知県豊田市、ツダが群馬県大泉町、ロスが静岡県浜松市、そしてカルヴァリヨは愛知や静岡に加えて岡山県や神奈川県でもフィールドワークを行なっている。その結果、国内の最も代表的なブラジル人集住地が「制覇」された。しかし、さらに重要な問題は、4人の関心事があまりにも似通っていることである。移民の「アイデンティティ」をめぐる諸問題が4人に共通する最大の関心事であり、それが各人の研究を特徴づけている（もちろん、それを長所と見るか短所と見るかは意見が別れるところだろう）。アイデンティティは言うまでもなく重要な問題である。しかし、それを重視するあまり、見落とされている他の論点があまにも多いのではあるまいか。

もしかしたら、このテーマ設定の類似性を促した最大の理由は、4人とも個人的な調査活動を行なっているという物理的な制約にあるのかもしれない。日本では、主に社会学者が巨大な調査チームを結成して共同研究に取り組むことが多いが、英語圏のデカセギ研究は、人類学者によるエスノグラフィーが中心である。共同研究がより優れた成果を生むという保障はないし、データの量やテーマの種類の豊富さだけで日米の研究成果（あるいは社会学と人類学との間）に優劣をつけるつもりなどない。しかし、「単独でも調べられること」という条件に研究テーマが規定されたという事実を抜きに、この4冊を語ることはできない。我々は彼らの研究を繙く

ことによって、調査の成果ばかりでなく、研究者の横顔を垣間見ることができる（あるいは少なくともそういう錯覚を覚える）。

インフォーマントとの距離の取り方は4人の間で微妙に異なる。文章から最も在日ブラジル人との親しい関係が伝わるのはロスのようなのだ。それを臭わせる記述は、ブラジル人仲間の何人かが彼のことを「詐欺人類学者」扱いしたり、「ユダヤ人」であることをからかったりしたことだ（Roth 2002: 15-16）。ロスは、その時、我慢の限界に達したと回想しているが、無遠慮のジョークや嫌みを言われたことは、裏を返せば、彼がブラジル人に真の仲間として受け入れられていた可能性を示唆している。著者はそれを熟知しているからこそ、これに言及したのだろう。

読者に対して自分がいかにインフォーマントと親しかったかを示そうとしないのはカルヴァリオだけで、リンガーもツダも随所でこの点を強調している。とりわけツダは最初の50ページ（！）をフィールドにおける「人類学者のアイデンティティの問題」に関する考察にあてており、フィールドワークにおける倫理的なジレンマに関する絶好の教材としても評価に値する。ただ、4人のうち、誰が最もブラジル人の「素顔」や「本音」に迫ることに成功したかは未決着のようにも思える。

4人の著書の表紙もなかなか示唆に富んでいる。ツダの場合は、一見ブラジル・カラーの緑が支配しているように見えるものの、真中にくっきりと日の丸が描かれているのに気づく。赤い太陽に映っているのは大泉のサンパパレードのダンサーたちであり、彼女らは群集に囲まれている。リンガーの著書の表紙には写真はなく、ブラジルを連想させる黄色が、日本を連想させる赤を大きく凌駕している。ロスの著書の表紙には、東京都庁をバックにした二人の笑顔の日系ブラジル人の写真が大きく写り、最も「顔の見える外国人」が登場している。同じ写真は本文の32ページにも使用され、表紙の二人がロスの友人の日系人であることが明かされる。日系ブラジル人の「顔」よりも「内面」に関心を抱くリンガー、浜松の友人たちの笑顔を思い出しながら原稿を書いたであろうロス、そして個々の特徴を越

えた集団としてのブラジル人を描こうとしたツダの視線が、それぞれの著作の表紙にも反映されているのだ。なお、カルヴァリオの著書だけは、(出版社の編集方針なのかもしれないが) タイトルと著者名しか記されていない。

4人の方法論には共通点も多いが、ここでは相違点に触れておこう。カルヴァリオはオーソドックスな方法で得たデータをどのように分析すべきかという、「結論の模索」にエネルギーを注いでいる。他の3人にとっては、フィールドそのものが戦場であり、データを得るプロセスそのものが勝負である。主たるフィールドとしてツダは工場、すなわち職場を、リンガーは住宅や団地を、ロス遊び場あるいは文化活動の場を選んでいく。ツダはブラジル人と一緒に汗を流し、リンガーはリラックスして長く話ができるオフの時間を共有し、ロスは同じオフの時間に精力的に何らかの活動を起こす人々と多くの日々を過ごしている。カルヴァリオはその点、いちおう愛知県で(期間は明記していないが)ブラジル人家族と同居して参与観察を行なったものの、岡山県で行なったアンケート調査や、他の3人よりは柔軟な設定でのインタビューに負うところが多い。

とりわけ3人の米国研究者に共通する魅力は、インフォーマントとの間で長期に渡って培われた関係のおかげで、量的調査や一回限りの聞き取り調査ではとうてい得られない、深みと厚みのある証言が得られたことである。リンガーとロスの場合は学術的な調査データにのみ頼らず、ブラジル映画や音楽に関する知識を総動員して効果的に引用している。また、共感できるか否かは別として、いずれの著書も刺激的な分析を展開していることは確かだ。それぞれの結語の章から一例だけを挙げよう。ツダは日本人のエスニックおよび国家アイデンティティが日系人の受け入れによって変化していないとし、「日系ブラジル人が日本でエスニック・アイデンティティの主張を続ける限り、彼らは日本社会に受け入れられないだろう」(Tsuda 2003: 380)。ロスも日本社会がブラジル音楽を受け入れたにもかかわらず、サンバを踊るブラジル人は歓迎していないことを悲観しながら

も、「日本社会は不本意かどうかは別として、より多文化的になりつつある」と、楽観的な見解も交える (Roth 2002: 144)。リンガーは文化的な要素が研究者に過大評価されているとし、「同じ『文化圏』に属するとされる人々でも、同じような状況 — 例えばトランスナショナルな状況 — を同じように捉えるわけではない」と、個々人の主観を尊重する (Linger 2001: 307)。そしてリンガー以外の研究者と同様、日系ブラジル人を複数形で語るカルヴァリオも最終的には移民の多様性を強調し、「(日系人の) コミュニティは多種多様な声によって構成され、かつそれらは絶えず変化している」と警鐘を鳴らす (Carvalho 2003: 149)。

4人の研究者に共通する長所の一つは、日本のみならずブラジルでも調査を実施している点にある。また、インフォーマントの言語 (すなわちポルトガル語) を習得しようとする姿勢には感銘を受ける。また全く日本語の関連文献を踏まえていないリンガーを除けば、他の3人の著書の参考文献リストには日本語の文献も数多く掲載されている。しかし、日本語 (およびポルトガル語) の文献の引用については、全般的には4人が日本に滞在していた1990年代半ばごろまでの文献に限られているという弱点が顕著である。4人ともエスニック・メディアに掲載された記事を頻繁に引用しているが、来日する前に各紙に掲載されていたバックナンバーを読み込んだ形跡はない。例えば、ロスが私が1994年にブラジル人向けに書いたポルトガル語の文章を一部抜粋し、在日ブラジル人が「同化して」(assimilated) おらず、「分離した」(distinct) 「目に見える」(visible) なエスニック・マイノリティとして生きている点を見落としていると指摘する (Roth 2002: 109)。抜粋された文章に限って言えば、彼の指摘は正当である。しかし、彼は、私の文章が、ブラジル人に対する挑発と問題提起を目的に、二人称で書かれていることを見落とした上、その後私が複数の論文やポルトガル語新聞に連載したコラムで、同じ問題をまったく異なった角度から考察していることを無視している。リンガーが問題視する「引用」と「抜粋」の正当性は、何も研究者とインフォーマントの関係に限る

ものではなく、研究者どうしの引用についても切実な問題であることをあらためて痛感した。そしてロスによる私の文章の引用を批判する本稿もまた、果たして正当な形で彼の論考を引用できているのだろうか、不安を抱かずにはいられないのだ。

3 ブラジルにおける研究動向

賛否両論はあるにせよ、高水準の研究が少なくとも4冊も日の目を見ている英語圏の研究に比べ、ブラジルにおけるデカセギ研究は、一般に手に入る出版物を見る限りでは、まだまだ一定の水準に達していないと言わざるをえない。しかし、バラエティに富んだアプローチがいくつも見られることは確かである。さらに、狭い意味での学術論文のみならず、エッセーやフィクションを含む広義のデカセギ論も視野に入れれば、日本語や英語圏の手堅い研究書が見落としているデカセギ移民の素顔や本音の描写に溢れている。これらのデカセギ関連本は、むしろ学術書以上に、この問題に関心を持つ人々に愛読・活用されており、その影響力は決してあなどれない。枚数の都合上、本稿ではそれらの書物を取り上げる余裕はないので機会をあらためて論じたいが、そのうちの数点は、「デカセギ文学」として拙稿 (Ishi 2003 b) で紹介しているので参照願いたい。

3-1 精神分析者による研究

まず、単行本として出版された学術書を5冊紹介したい。5冊中、社会学者によって書かれたものが1冊のみで、人類学者による著書が皆無という点が、日本や英米でのデカセギ研究と大きく異なる。

1995年に出版されたレイメイ・ヨシオカの『なぜ私たちは日本からおよび(日本)へ移民するのか』(『Por que migramos do e para o Japão』)は、日本ブラジル文化協会(以下、文協)の現副会長でもある地理学者が、サンパウロ大学に提出した博士論文が基になっている。本書はサンパウロ州の有名な日系人集住地であるリアンサ(Aliaças)の事例研究を通して、

日本からブラジルへの移民史とブラジルから日本へのデカセギ現象を論じている。学術書とはいえ、本書は一種の政策マニフェストとして読むこともできる。著者は文協のビル内に設置された国外就労者情報援護センター（CIATE）で数年にわたって日本へのデカセギ希望者への相談に従事し、そこから得られた問題意識と具体的な政策案を本書に盛り込んでいる。とりわけ「結語」（Yoshioka 1995: 159-165）では、資本主義の論理に支配された社会の歯車として翻弄され搾取される人々の弁護と体制批判を展開している。なお、未見であるのでここでは紹介のみに止まるが、本書でしばしば引用されるアサリの研究（Asari 1992）は、サンパウロ大学地理学科に提出された博士論文で、パラナ州の Assaí（アサイ）という有名な日系人集住地の事例研究を基にしているとされる。

他方、1999年に出版されたリリ川村の著作（Kawamura 1999）は、ブラジル在住の社会学者による数少ないデカセギ問題の総論として注目され、ブラジルの大手マスコミでもしばしば引用されている。本書は2000年に日本語版が出版されている（川村 2000）ので、ここでは内容に詳しく触れる必要はないが、とくに斬新な分析が試みられているわけでもなく、内容に新鮮さはない。しかし、デカセギの諸問題について基礎知識を求めている読者にとっては、有数の「ブラジル人から見た」デカセギ論である。

注目に値するもう一冊は、同じ内容がポルトガル語、英語と日本語の3カ国語で分厚い一冊に収められているレイスの著作（レイス 2001）だ。在日ブラジル人への支援対策に積極的に取り組んだ外交官が執筆した論文を基にしているが、職務上、一般の研究者にはアクセスが困難な外交文書を利用できたため、めったに公開されないブラジル政府の在外ブラジル人への支援政策の舞台裏に光が当てられている。ちなみに著者は元駐日ブラジル大使夫人であり、東京の領事館に務めていた頃は、ブラジル人の市民代表者会議の設立に大きな役割を果たした。

4冊目はカリナト他編著の『精神分析、文化、移民』（Carignato et al. 2002）という興味深い題名の書物である。これは、精神分析学者を中心

とする研究会が移民問題について様々な専門家に講演を依頼し、その発表内容をまとめたものである。そこには、日本でもフィールドワークを行なった社会学者エリーザ・ササキによるアイデンティティ論 (Sasaki 2002) をはじめ、法律論も掲載されているが、むしろ興味深いのは、日系人社会と普段はまったく接点のない、そしてデカセギの利害にはまったく関与しない「非日系人」の研究者たちがこの問題をどう捉えているかという点である。彼らの論点は、良い意味でも悪い意味でも抽象的なものが多いが、それが精神分析学の特徴なのかもしれない。参考までにいくつかの章のタイトルを挙げるとすれば、クロシクによる「差別されるヴィジビリティ」(Crochik 2002)、アルダンスによる「距離の住民」(Ardans 2002)、パシェッコ・フィーリオによる「人の移動、放置、レイシズムと排外主義」(Pacheco Filho 2002) が挙げられる。

なお、編著者の一人でもある精神分析学者のカリナトは「なぜ彼らは移民するのか?」という章を執筆している (Carignato 2002a)。移動には必ず様々な概念の意味の揺らぎを伴うことを強調する彼女は、移動の繰り返しによって「裕福になる」「働く」「戻る」などの概念がそれぞれの移民にとって持つ意味が確実に変化していることを指摘する。彼女は、このテーマに関する修士論文を基にした単著 (Carignato 2002b) も出版している。

カリナトの編著にも寄稿している精神分析学者と心理学者のデシオ・ナカガワとキョウコ・ナカガワの夫妻は、著書こそ出版はしていないが、ブラジルの日系新聞で頻繁かつ積極的にデカセギ関連の諸問題に言及している、有数のオピニオンリーダーである。二人が作った「帰国シンドローム」(Síndrome do regresso) という、デカセギ帰国者特有の精神障害を示す用語は流行語にさえなっている。

以上の主要な著作にもう一冊加えるならば、またもや精神分析学者が綴った『デカセギ者が夢見た道』が挙げられる (Galimberti 2002)。著者は、サンパウロ市やパラナ州のマリングア市およびロンドリーナ市という、いずれも日系人が多く住む都市で開業医を務める中で、主に1990年代半ば

から、デカセギ帰りの日系人の患者数が急増したのに気づいて研究を始めたという。本書は、単なる患者の事例紹介に終始していない点が魅力的である。例えば、第2章は日本特有の「恩」、「義理」、「忠」や「切腹」文化が紹介され、それが（米国に移民したブラジル移民とは異なった）日系人の主観の解読に有効だとされる。なぜ彼らの精神分析を行なうために徳川時代に遡ったりベネディクトの『菊と刀』を引用しなければならないのか、疑問が残るものの、グローバル時代の移民に特有の悩みを考察する第3章や第4章は、「必要性」(necessidade)と「願望」(vontade)を対比するなど、日本や英米の社会学者や文化人類学者による分析とはひと味違って興味深い。

なぜブラジルの精神分析学者がデカセギ研究に興味を抱くのかはおおよそ見当はつくが、なぜデカセギ研究全般の中で精神分析学だけがこれほど大きな比重を占めているのかについては、明確な理由が見当たらない。ただ、彼らがブラジルを研究の拠点としている以上、デカセギ帰国者の再適応問題に関心を抱くのが不思議ではないということだけは確かである。

3-2 シンポジウムの報告書

ブラジルで出版されているデカセギ関連の書物を見渡すと、シンポジウムでの発表をまとめたものが多い。最も古い例はニノミヤの編著(Ninomiya 1992)で、サンパウロ市の文協で行なわれたシンポジウムの報告を基にしている。1990年代前半当時は、まだ悪質なブローカーによる諸問題が後を断たなかったが、本書はその時代にブラジルでいかなる問題が認識されていたかを知る上で貴重である。ニノミヤが日本からブラジルへの移民85周年を記念したシンポジウムを基にして出版した(Ninomiya 1996)にも、デカセギ経験者の体験談など、デカセギに関する論考が所収されている。

他方、Ninomiya (2004)は前述した援護センターによるセミナーを書物にしたもので、ポルトガル語と日本語の二ヶ国語の文章が同じ一冊に収

められている。日本語のタイトルは「地域コラボドーレス研修セミナー報告書」と記され、いわゆる「コロニア語」(移民特有の言葉)の「コラボドーレス」(協力者の意)という言葉が用いられている点が興味深い。またポルトガル語の書名ではデカセギが“Decasséguis”と表記されているが、これはポルトガル語の二大辞典の一つ(Dicionário Houaiss)での表記に従ったのだと考えられる。12年前のシンポジウム報告書では“Dekassegui”という表記が用いられたが、時代の違いを感じさせる。むろん、報告内容にも、例えば「子供の教育問題」が加わるなど、関心分野にも様々な変化が見られる。

他にも2000年9月にブラジル大学で行なわれた「日本の言語、文学および文化を研究する大学教員による第12回全国大会」が単行本として出版されている(UnB 2000)。また、様々な「国際移民」をテーマにした共著の中に収録されたクラグスブルン(Klagsbrunn 1996)は、ブラジル人の米国および日本への移民を比較しながら、世界経済のグローバル化と労働市場の変化を考察しているが、デカセギ関連の記述は手薄である。

番外編として紹介したいのは、書物ではなく、CD-ROMというかたちで配布された、「デカセギ現象20周年記念ブラジル-日本比較教育国際シンポジウム」の報告(ISEC 2005)である。これは文協の中で設立されたデカセギ子弟の教育問題を考えるための組織が主催したシンポジウムをきっかけに作成されたものだが、その中心メンバーは前述したヨシオカとナカガワ夫妻である。また教育問題については、早い段階からこの問題について積極的に発言しているシノダの著書(Shinoda 1995)も必読である。

最後に特筆したいのは、主として米国在住のブラジル移民を扱った論文集(Reis e Sales 1999)に収録されている、社会学者アドリアナ・オリヴェイラによる「デカセギ移民のアイデンティティを再考する」(Oliveira

1999)と、前述したエリーザ・ササキによる「出稼ぎ現象 — 在日日系ブラジル人の移住とアイデンティティの経験」(Sasaki 1999)である。両者とも、論点そのものは日本や英米でも展開されている「日本でブラジ

ル性に目覚める日系人たち」というアイデンティティ論とさほど変わらない。しかし、同じカンピーナス大学大学院の研究仲間でも、日系人であるササキと日系人でないオリヴェイラとの間には、微妙な視点の違いが見られる。ササキの主眼は、あくまでも日系ブラジル人がアイデンティティをどのように交渉（ネゴシエーション）しているか、そしてこの経験が移民にとっていかなる意味を持つかという点にある。対するオリヴェイラは、ブラジルにおける日系人をアフリカ系の「黒人」と比較するなど、日系人の経験をブラジル社会の人種問題とも関連づけようとしている。

4 結びに代えて——英米の研究の限界とブラジルの研究の可能性

本稿では英米とブラジルにおけるデカセギ関連の研究動向を紹介してきたが、英米の研究の比較分析に力が入ったのは、やはり一つ一つが魅力的であるからだと思えざるをえない。それに比べ、ブラジルで発表されている研究は質量ともに物足りないが、これが研究状況の問題（出版に値する研究成果が上がっていないこと）に起因しているのか、それとも出版業界の慢性的な不況のせいで、日本や米国ならすでに刊行されているはずの学位論文がどこかの大学図書館で眠っているからなのか、詳しい事情は分からない。しかし、前述したとおり、学界以外の現場で独創的なデカセギ論が展開されていることは特筆すべきである。とりわけシルヴィオ・サム の作品（Sam 1997）は、フィクションとルポルタージュとエッセーを合成した試みで、米国の作家カレン・テイ・ヤマシタの作品のブラジル版と捉えることもできよう。むろん、フィクションとノンフィクションの境界線に位置するデカセギ論としては、1993年にジャーナリストのマルコ・ラセルダが発表した作品（Lacerda 1993）がある（同作品は1994年に『サンパウロ・コネクション』という題名で邦訳されている〔小高利根子訳、文藝春秋刊〕）。しかし、下ネタやセンセーショナルな話題で興味を引こうとしたラセルダの戦略には、シルヴィオ・サム（そしてヤマシタ）の「デカセギ・パズル」を解説しようとする姿勢、すなわち研究者の視点が欠けてい

る。この他、2005年にはサンパウロ市の『ニッケイ新聞』の連載小説を単行本化したアウグスト・ヤマザトの作品 (Yamazato 2005) がポルトガル語と日本語でそれぞれ出版された。

最後に、同胞にアメリカかぶれとして冷やかされないためにも、英米の研究者たちの限界について一言だけ加えよう。本人たちが自覚しているか否かは別として、本稿で紹介した4人の研究者に共通する最大の利点は、同時に彼らの欠点でもある。すなわち、彼らの「ホーム」が日本というフィールドから離れていることである。彼らがいかにインフォーマントと深く関わり、そのいく人かと親しくなり、コミュニティ内部の利害関係に一時的に巻き込まれ、そのしがらみに束縛されても、いずれは現場を離れることができるという「保険」(安心感)があった。そして事実、彼らはあらかじめ計画した日本滞在期間を終えると、きっぱり見切りをつけて、それまで得られたデータを持って米国や欧州に羽ばたいたのである。

日本やブラジルを拠点とする研究者は(日本人であろうがブラジル人であろうが)、移民の送り出し国か受け入れ国に住んでいる以上、いつ「フィールドワーク」というゲームの終了を示すホイッスルを吹けばいいのか迷うことが多い。事態は日々変わり、テーマはひっきりなしに増えるばかりである。したがって、いつになっても「この当たりで十分だ」と決断できない。学界においては研究の価値は様々な基準で評価されるが、フィールドでは常にその「応用性」が厳しく問われる。無数の研究者が出入りしているサンパウロ市の東洋人街や静岡県浜松市では、調査の対応に疲れたインフォーマントたちが「あなたの調査は具体的にどう役立つのか」と、成果の社会への還元を要求する。

4人の英米研究者は、こういう現場からの距離に守られ、安全地帯を確保したからこそ、「総括的」な本をまとめることができたのだろう。意地悪な見方をすれば、デカセギという問題は、彼らの多くにとっては出世作を生む素材にはなり得たが、「飽きれば」簡単にこのテーマを手放すことができる。いくら彼らが在日ブラジル人の行方を案じていると声を張り上

げても、コミットメントの度合いがブラジル人研究者に比べて低いのである。さらに、英語圏ではアイデンティティ問題の過大評価が見受けられ、アイデンティティ研究こそが重要なのだという問題設定が完了しているように見える。だとすれば、後発の研究者が新たな問題を設定するにはかなりの労力を要するだろう。

ブラジルの場合、研究者のテーマ選びが現場の声に應えるべく「今そこにある危機」に偏り過ぎたきらいが多少はあるものの、よくも悪くもデカセギをめぐる問題設定が完了していない。そのぶん、研究者はのびのびと、思い思いのテーマを設定する自由がまだ保障されているように思える。その意味では、長期的に見れば、周囲を驚かせるような新鮮なデカセギ論は案外、欧米発よりもブラジル（人）の研究者から生まれやすいのかもしれない。もっともこれは、ブラジルの研究者が英米（そして日本）の研究成果を踏まえつつも、なおその問題設定を疑問視する度胸が保てるという大前提に基づいた希望的観測に過ぎないのだが。

参考文献

- Ardans, Omar. “Os habitantes da distância (A propósito de Freud e Cannetti).” in T. Carignato, M. Rosa, e R. Filho (orgs.) *Psicanálise, Cultura e Migração* (São Paulo : YM Editores), pp. 227–238.
- Carignato, T., M. Rosa, e R. Filho (orgs.) 2002. *Psicanálise, Cultura e Migração* (São Paulo : YM Editores).
- Carignato, Taeco Toma. 2002a. “Por que eles emigram?”. in Carignato, T., M. Rosa, e R. Filho (orgs.) *Psicanálise, Cultura e Migração* (São Paulo : YM Editores), pp. 55–66.
- Carignato, Taeco Toma. 2002b. *Passagem para o Desconhecido. Um estudo psicanalítico sobre as migrações entre Brasil e Japão* (São Paulo : Via Lettera).
- Carvalho, Daniela de. 2003. “Nikkei Communities in Japan”. in R. Goodman et al. (eds.), *Global Japan – The Experience of Japan’s new immigrant and overseas communities* (London : RoutledgeCurzon), pp. 195–208.
- Chigusa, Charles, ed. 1994. *A Quebra dos Mitos – O fenômeno Dekassegui através de relatos pessoais* (Atsugi : International Press Corporation).

- Crochík, José Leon. 2002. "A visibilidade discriminada." in T. Carignato, M. Rosa, R. Filho (orgs.) *Psicanálise, Cultura e Migração* (São Paulo : YM Editores), pp. 125–132.
- Galimberti, Percy. 2002. *O caminho que o dekassequi sonhou. – Cultura e subjetividade no movimento dekassequi* (São Paulo : educ).
- Higa, Marcelo G. 2002. "The Emigration of Argentines of Japanese Descent to Japan." in Lane Ryo Hirabayashi et al. (eds.), *New Worlds, New Lives – Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin America in Japan* (Stanford : Stanford University Press), pp. 261–278.
- Hirabayashi, Lane Ryo et al. (eds.). 2002. *New Worlds, New Lives – Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin America in Japan* (Stanford : Stanford University Press).
- Hollan, Douglas. 1997. "The Relevance of Person-centered Ethnography to Cross-cultural Psychiatry." *Transcultural Psychiatry* 34 (2), pp. 219–234.
- Houaiss, Antônio. 2001. *Dicionário Houaiss da Língua Portuguesa* (São Paulo : Objetiva).
- ISEC. 2005. *Simpósio Internacional de Educação Comparada Brasil-Japão – 20 anos do movimento dekassequi*. São Paulo, 10 e 11 de setembro de 2005. (CD-ROM).
- Ishi, Angelo. 1994. "Quem é quem no tribunal da discriminação". in Charles Chigusa (ed.), *A Quebra dos Mitos – O fenômeno Dekassegui através de relatos pessoais* (Atsugi : International Press Corporation), pp.135–137.
- . 2003a. "Searching for Home, Wealth, Pride and "Class": Japanese-Brazilians in the "Land of Yen"." in Jeffrey Lesser (ed.), *Searching for Home Abroad : Japanese-Brazilians and Transnationalism* (Duke : Duke University Press), pp. 75–102.
- . 2003b. "Transnational Strategies by Japanese-Brazilian Migrants in the Age of IT." in R. Goodman et al. (eds.), *Global Japan – The Experience of Japan's New Immigrant and Overseas Communities* (London : RoutledgeCurzon), pp. 209–221.
- . 2003c. "Making History, Reinterpreting Experiences : The Ethnic Media among Brazilians in Japan." in Mutsuo Yamada (org.) *JCAS Symposium Series vol. 19 – Population Movement in the Modern World VII* (Osaka : National Museum of Ethnology), pp. 473–490.
- 川村リリ. 2000. 『日本社会とブラジル移民』 明石書店。
- Klagsbrunn, Victor Hugo. 1996. "Globalização da economia mundial e mercado de

- trabalho : a emigração de brasileiros para os Estados Unidos e Japão”. *Migrações internacionais – Herança XX Agenda XXI* (Campinas : FNUAP).
- Lacerda, Marco. 1993. *Favela High-Tech* (São Paulo : Scritta Editorial).
- Lesser, Jeffrey (ed.). 2003. *Searching for Home Abroad : Japanese-Brazilians and Transnationalism* (Duke : Duke University Press), pp. 75–102.
- Levy, Robert I. 1994. “Person-centered Anthropology”. in Robert Borofsky (ed.) *Assessing Cultural Anthropology* (New York : McGraw-Hill).
- Linger, Daniel Touro. 2001. *No One Home : Brazilian Selves Remade in Japan* (Stanford : Stanford University Press).
- Linger, Daniel Touro. 2003. “Do Japanese Brazilians Exist?” in Jeffrey Lesser (ed.), *Searching for Home Abroad : Japanese-Brazilians and Transnationalism* (Duke : Duke University Press), pp. 201–214.
- Mori, Edson. 2002. “The Japanese-Brazilian Dekasegi Phenomenon : An Economic Perspective.” in Lane Ryo Hirabayashi et al. (eds.). *New Worlds, New Lives – Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin America in Japan* (Stanford : Stanford University Press), pp. 237–248.
- Nakagawa, Décio Issamu. 2002. “Migração e saúde mental.” in Carignato, T., M. Rosa, R. Filho (orgs.) *Psicanálise, Cultura e Migração* (São Paulo : YM Editores), pp. 221–226.
- Nakagawa, Kiyoko Yanagida. 2002. “As crianças envolvidas no movimento de kassegui.” in T. Carignato, M. Rosa, e R. Filho (orgs.) *Psicanálise, Cultura e Migração* (São Paulo : YM Editores), pp. 197–206.
- Ninomiya, Masato (org.). 1992. *Palestras e Exposições do Simpósio sobre o fenômeno chamado Dekassegui* (São Paulo : Estação Liberdade, Sociedade de Cultura Japonesa).
- Ninomiya, Masato (org.). 1996. *O futuro da comunidade nikkey* (São Paulo : Mania de Livro).
- Ninomiya, Masato. 2002. “The Dekasegi Phenomenon and the Education of Japanese-Brazilian Children in Japanese Schools.” in Lane Ryo Hirabayashi et al. (eds.). *New Worlds, New Lives – Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin America in Japan*. (Stanford : Stanford University Press), pp. 249–260.
- Ninomiya, Masato (org.). 2004. *Anais do Seminário de Capacitação Humana para DECASSÉGUIS*. (São Paulo : CIATE).
- Oliveira, Adriana Capuano de. 1999. “Repensando a identidade dentro da emigração de kassegui.” in Rossana Reis e Teresa Sales (org.) *Cenas do Brasil*

- migrante* (São Paulo : Boitempo Editorial), pp. 275–307.
- Pacheco Filho, Raul Albino. 2002. “Migração, desamparo, racismo e xenofobia.” in T. Carignato, M. Rosa e R. Filho (orgs.) *Psicanálise, Cultura e Migração* (São Paulo : YM Editores). pp. 257–264.
- Reis, Maria Edileuza Fontenelle. 2001. *Brasileiros no Japão : O elo humano das relações bilaterais* (São Paulo : Kaleidos/Primus).
- Reis, Rossana, e Teresa Sales (org.) *Cenas do Brasil migrante*. (São Paulo : Boitempo Editorial).
- Roth, Joshua Hotaka. 2002. *Brokered Homeland : Japanese Brazilian Migrants in Japan* (Ithaca : Cornell University Press).
- Roth, Joshua Hotaka. 2003. “Urashima Taro’s Ambiguating Practices : The significance of Overseas Voting Rights for Elderly Japanese Migrants to Brazil.” in Jeffrey Lesser (ed.), *Searching for Home Abroad : Japanese–Brazilians and Transnationalism* (Duke : Duke University Press), pp. 103–119.
- Sam, Silvio. 1997. *Sonhos que de cá segui* (São Paulo : Ysayama).
- Sasaki, Elisa Massae. 1999. “Movimento de kassegui – A experiência migratória e identitária dos brasileiros descendentes de japoneses no Japão.” in Rossana Reis, e Teresa Sales (org.), *Cenas do Brasil migrante* (São Paulo : Boitempo Editorial), pp. 243–274.
- Sasaki, Elisa Massae. 2002. “Dekassegui : um jogo identitário.” in T. Carignato, M. Rosa, e R. Filho (orgs.) *Psicanálise, Cultura e Migração* (São Paulo : YM Editores), pp. 29–54.
- Sellek, Yoko. 1997. “Nikkejin : The Phenomenon of Return Migration”. in Michael Weiner (ed.) *Japan’s Minorities – The Illusion of Homogeneity* (London : Routledge), pp. 178–210.
- Shinoda, Carlos. 1995. *Porutogarugo Ga Iya Da!* (São Paulo : Aliança Cultural Brasil–Japão).
- Takenaka, Ayumi. 2003. “Paradoxes of Ethnicity–based Immigration : Peruvian and Japanese–Peruvian Migrants in Japan.” in R. Goodman et al. (eds.), *Global Japan – The Experience of Japan’s New Immigrant and Overseas Communities* (London : RoutledgeCurzon), pp. 222–236.
- Tegtmeyer Pak, K. 2000. “Foreigners are Local Citizens Too : Local Governments Respond to International Migration in Japan”. in Mike Douglass and Glenda Roberts (eds.), *Japan and Global Migration : Foreign Workers and the Advent of a Multicultural Society* (London : Routledge), pp. 244–274.
- Tsuda, Takeyuki. 2003a. “Homeland–less Abroad : Transnational Liminality, Social

- Alienation, and Personal Malaise". in Jeffrey Lesser (ed.), *Searching for Home Abroad: Japanese-Brazilians and Transnationalism* (Duke: Duke University Press), pp. 121–161.
- Tsuda, Takeyuki. 2003b. *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective* (New York: Columbia University Press).
- UnB. 2000. *ANAIS XI Encontro Nacional de Professores Universitarios de Língua, Literatura e Cultura Japonesa* (I Encontro de Estudos Japoneses 1 e 2 de set. 2000, Universidade de Brasília – UnB, Departamento de Línguas Estrangeiras e Tradução).
- Yamanaka, Keiko. 2000. "I will go home, but when?" – Labor Migration and Circular Diaspora Formation by Japanese Brazilians in Japan". in Mike Douglass and Glenda Roberts (eds.), *Japan and Global Migration: Foreign Workers and the Advent of a Multicultural Society* (London: Routledge), pp. 123–152.
- Yamashita, Karen Tei. 1992. *Brazil–Maru* (Minneapolis: Coffee House Press).
- Yamashita, Karen Tei. 2001. *Circle K Cycles* (Minneapolis: Coffee House Press).
- Yamashita, Karen Tei. 2003. "Circle K Cycles." In Jeffrey Lesser (ed.), *Searching for Home Abroad: Japanese-Brazilians and Transnationalism* (Duke: Duke University Press), pp. 121–161.
- Yamazato, Augusto. 2005. *Os 7 "Dekasseguis"* (São Paulo: Nikkey Shimbun).